



IBD HERO MATCH トークイベントレポート



潰瘍性大腸炎患者さん

元ラグビー選手 川西 智治さんのPatient Journey

【川西智治さん・略歴】

ラグビー強豪校である流通経済大学付属柏高等学校、流通経済大学を経て2010年にトヨタ自動車ヴェルブリッツへ入団。11年間フッカーとして活躍後2021年に引退。2020年に潰瘍性大腸炎であることを公表。

ギリアドは2022年5月7日、トヨタ自動車のラグビーチームであるトヨタヴェルブリッツの協力のもと、「IBD HERO MATCH (IBD ヒーロー・マッチ) トークイベント」を開催しました。当日は、炎症性腸疾患 (IBD) の一つ、「潰瘍性大腸炎」の患者さんでもあるトヨタヴェルブリッツOB 川西智治さんをお招きし、ご自身の経験についてお話しいただきました。

潰瘍性大腸炎は、大腸の粘膜に炎症が起こる病気です。患者さんの数は日本国内で約12万8,000人 (日本消化器学会「炎症性腸疾患 (IBD) 診療ガイドライン」/2017年時点) となっており、国の指定難病にも認定されています。下痢や腹痛、発熱など様々な症状が見られますが、周囲には伝わりづらい疾患です。

ある朝、便器が真っ赤に。 “深刻に感じなかった”

体に異変が起きたのは2011年、トヨタヴェルブリッツに入団して2年目の夏合宿でした。朝、トイレで用を足してふと便器を見ると真っ赤になっていました。トレーナーに報告して病院に行き診察を受け、潰瘍性大腸炎と診断されました。

当時、潰瘍性大腸炎という病気は知りませんでした。突然だったけれど、痛みはないですし、腹を打った記憶もありませんでした。血はたくさん出ていたけれど、ラグビー選手なので見慣れていたので、そこまで深刻に考えてはいませんでしたね。

当時は、血便といった症状は出ているものの1年ほどは気に留めず、ラグビー選手として激しいトレーニングをこなしていました。

諦めることのなかった、 日本代表への「夢」

症状が重くなったのは発症の翌年2012年です。シーズン中に調子が悪くなり、トイレに行く回数が増え

ました。試合中や練習中は大丈夫でも、試合から離れると不安が付きまといました。特にラグビー選手はホテルと練習場、試合会場と車での移動が頻繁にあります。いつトイレに行きたくなるか分からないので、何も食べずに車に乗っていました。

2012年シーズンは、出場機会が増え、やっと掴んだチャンスの年でした。僕のポジションであるフッカーは体重のコントロールが不可欠です。体重に不安はあったけれど、世界レベルの選手に当たり負けしなかったですし、やっていけると思っていました。

3年目の活躍を受けて、自分のプレーに確かな自信を感じる事が出来ました。一方、病気については監督やチームメイトには話しておらず、トレーナーや主務など一部のみが知っている状況でした。

そしてその翌年の2013年、またも病状が悪化し、結果的に入院を余儀なくされます。

食事をするとう大腸に負担がかかってしまうため、水だけの絶食生活です。アスリートにとって食事は死活問題でした。あっという間に筋肉が落ちて、100kg近くあった体重は80kgを下回りました。鏡を見るのが嫌でした。

その当時の支えは、“ラグビーで活躍して、日本代表になりたい”という強い気持ちでした。絶対に代表選手になる。それ以外のことは考えていませんでした。練習をすれば、強くなれる。そう信じていました。



医師と二人三脚で、納得のいく治療を

医師もラグビー選手生活を支えてくれました。僕の場合は、自分がどんな生活を送りたいかという意思が明確にありました。プレーができる体を維持しながら、良いパフォーマンスを出して、夢を追いかけていたいという希望を医師にしっかり伝えました。医師とのコミュニケーションはプレーに直結します。だからこそ、何でもフランクに話し合いました。

治療に納得がいかない時や、自分に合わないと感じた時は率直に伝えるようにし、医師と一緒に最善の方法を考えていました。もちろん、治療に対する考え方が合わないこともあります。納得するためにセカンドオピニオンも利用し、名古屋と東京、2つの病院で最善策を模索しました。親身になってサポートしてくれる2人の医師とは良好な関係が続いています。

また、チームや会社のバックアップも支えとなりました。潰瘍性大腸炎は目に見える病気ではありません。症状が悪化しなければ、普通に生活することができます。それゆえ、ストレスがかかりやすいものです。精神面のサポートも大きかったです。周りにいるたくさんの人に支えられているからこそ、病気と付き合いながらラグビーができていますと実感しました。

病気を“治す”のではなく“付き合う”

病気のことは、両親にすら伝えていませんでした。母親に打ち明けたのは、2014年の2度目の入院時でした。そこで、母親も潰瘍性大腸炎であることが分かったのです。

母親の“病気を体の一部だと思って一緒に生活しなさい。飲み過ぎず、食べ過ぎず。何事もバランスが大

事”という言葉がとても印象に残っています。ずっとアスリートとしてやってきたから、休むことは悪だと思っていましたが、がむしゃらに頑張るのではなく、考えて努力するというきっかけを与えてくれたと思います。

2回目の入院以降、心境は大きく変わりました。病気を“治す”のではなく“付き合う”こと。大変な時期に無理をしないこと。そして、自分が幸せになるために必要なことを考え、その上で努力していく、という考えに変わり始めました。そうすることが、いいパフォーマンスにつながってきたと感じましたね。

僕の経験が、 誰かの希望や勇気につながれば

2020年に、潰瘍性大腸炎であることを世間に公表しました。周りを幸せにすることが僕の幸せにつながり、病気の経験を発信することで、周りを幸せにできるのではないかと考えました。また、テレビで著名人が潰瘍性大腸炎であることを公表しており、それに自分自身も、とても勇気付けられた経験があります。自分も公表し、活躍してメディアに露出して広めていければと思います。

潰瘍性大腸炎と付き合い続けて約10年間、トップリーグという第一線場で活動してきましたが、病気を公表した翌年の2021年に現役を引退しました。僕はラグビーで活躍したかったので、潰瘍性大腸炎になって良かった、なんて思わないです。それでも、病気になったからこそ得られたものは大きく、考えて努力することを学び、その中でレギュラーに返り咲くなど、一定の結果が残せたと思っています。

人々にスポーツを通して夢や希望を与える「選手」という立場から変わっても、僕の“夢や希望を与えたい”という想いは変わりません。ラグビー人生と第一の夢は終わりました。これからは第二の人生で夢を見つけたいです。僕の経験が少しでも同じ病気で苦しんでいる人の役に立てば、フィールドから離れた場所でも、多くの人に希望や勇気を与える存在になりたいですね。

